

二次元ぷち文庫

おしかけ  
お嬢さま

外伝

私はあなたのメイドですっ

天戸祐輝

表紙イラスト：うにあはと

試し読み版

**当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『おしかけお嬢さま外伝 私はあなたのメイドですっ!』  
に基づいて作成しております。**

※本作は二次元ドリーム文庫『おしかけお嬢さま 私と同棲しなさいっ!!』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



外伝  
おしかけ  
お嬢さま  
私はあなたのメイドですっ!

天戸祐輝  
表紙 / うにあはと

## 登場人物紹介

### Characters

---

きもと かすみ

#### 沙元香澄

半ば遊び友達として由美那ゆみなに仕えるメイド。聡志にも好意を持っており、由美那だけでなく自分の意思で彼にも仕えている。家事全般が得意で美しく優しく、しかもスタイルは抜群。

かわく さとし

#### 川久聡志

突然由美那と香澄におしかけられ、幼馴染みも含めた三人とエッチしてしまった少年。現在は許婚である由美那と、そのメイドである香澄と安アパートで同棲中。

「起きなさい、聡志っ」

いきなり、身体の上から高圧的な美声がかけられてきた。

が、床で寝かされていた数日前ならともかく、部屋の大半を占めるキングサイズベッドで、二人の美少女に挟まれて寝ている今ではありえないことだ。

なので、起こそうとする声を完全無視して眠り続ける。

「このわたくしが起こしてあげているんですよ、早く起きなさいっ！」  
はつきり言っている。

せっかくの連休。しかも、学園もファミレスのバイトも休みなのだから、もう少しはゆつくりと寝ていたい。

「まったく。このわたくしを無視して寝続けるなんて、いい度胸ですわね……」

「うっ、うっ……ん。由美那の……むにゃむにゃ……胸……」

「なっ、なにをいきなり言っていますのっ!？」

照れているのだろうか。

身体の上から聞こえる高圧的な美声が、可愛らしい声になっている。しかし、まだ半分以上夢の中にいるので、よく分からない。

「むにゃむにゃ……、より……も、香澄さんの……大きなおっぱいで起こして……」

「——っ！寝ているからって、わたくしよりも香澄の胸を選ぶなんて……、早く起き

なさい聡志っ。目を覚ましたら、立ち直れないほどの侮蔑をぶつけて差し上げますわっ！」  
「……だから、もう少し寝かせて……くうくうくう」  
寝ぼけながら、思わず口走ってしまった言葉を理解することもなく、再び夢の中に戻っていく。

だが、さすがにこのまま寝かせてはくれないようだ。

上からの声に怒りの色が混ざり、荒くなつた息が聞こえてきた瞬間。

「こつ、このわたくしを無視して眠り続けるなんて、ぜつたいに許さないんだからっ！」  
バスッ！

「んごっ!!」

いきなり、寝ていた顔にクッションが投げつけられてきた。

さすがに、これでは寝ていられない。

しかたなく、重いまぶたを開いてみれば、ふかふかベッドで寝ている自分を跨ぎ、腰に両手を当てた高圧的な態度で立っている金髪ツインテールの少女が、寝ぼけて霞んでいる目に映ってきた。

「うっ、うううん……。なんでそんな恰好で……」

起こしてくれるなら、もつと普通の起こし方をして欲しい。と思いながらも、自分に跨がり立っている彼女を見つめる。

小さな輪郭の顔に、整えられた細眉。気が強そうに目尻がツリ上がった青い目に、形が  
いい桜色の唇が印象的な美少女。

しかも、ティーンズ雑誌のモデルでもできそうなスタイルのいい肢体に、白い半袖ブラ  
ウスに、淡いピンクのタイトミニスカートを着ている。

清楚な令嬢。という言葉葉がぴつたりな姿だ。

そんな見た目だけなら最高の美少女に起こしてもらい、本来なら飛び起きてしまうほど  
嬉しい状況。なのだが、素直に喜ぶことができない。

「やっと思ってきましたのね、川久聡志っ！ このわたくしに起こしてもらえるなんて、どん  
なに幸せ者なんですのっ！」

「……………」

なにも言えない。

だいたい、なんでいきなりフルネームで呼んでくるのだろうか。しかも身体の上に跨が  
り立ったままの高圧的な態度で。

「起きたのなら、まずこのわたくしにあやまりなさいっ。寝ぼけていたとはいえ、許婚の  
わたくしよりも香澄を選ぶなんて、ぜったいに許せませんわっ！」

「おまえ、言っている意味がよく……………」

「聡志さま。お嬢さまの言われていることは本当です。寢言で、由美那の胸より、香澄の

大きなおっぱいで起こして。と言ってくれました」

あやまれと言っている意味が分からず、自分を見下しながら跨がり立っている由美那に文句を言おうとした矢先。

ベッドの足元の方から、アパートの狭いキッチンに立っている、夏用の半袖メイド服姿の少女が話しかけてきた。

同じ年の聡志や由美那よりも、少しだけ年上な香澄は、若いながらも大人びた美貌に、優しげなヒスイ色の瞳。小さく高い鼻に、笑みを絶やさないピンクルージュの唇が印象的な美少女だ。

艶のあるロングストレートの栗髪は、その毛先をお尻にまで届かせて揺らし、十人のうち九人は、間違いなく理想的なお姉さまに選ぶ女性である。

「私に起こして欲しいと思ってくれたなんて、寝言でもうれいんです。聡志さまっ」  
少し頬を染めながら、指先で何度も毛先をクルクルさせながら照れられても困る。  
しかし、今はそんなことで困っている状況ではない。

お嬢さまの青い瞳が、恐ろしいほど目尻をツリ上げて睨んでいる。

「さあ。あやまりなさい聡志っ。でないと、裸で町中を走らせますわっ！」

「……………ごめん」

おしかけてきた由美那と香澄と共に、この狭いアパートの部屋で暮らすようになってか



ら十数日。彼女がこのような態度できた時は、本当に裸ランニングをさせられてしまう可能性が高い。

なので、納得はいかないが、素直にあやまっておく。

「まったく、おっぱいで起こして。つて、どんな状況なんですのっ。でも、あやまったから許して差し上げますわ。宇宙よりも広大な心を持ったわたくしに感謝なさい」

広大どころか、極小極狭の心。のような気もするが、言ったところでムダなだけだ。

「よく聞きなさい聡志。わたくし、これから用事があつて実家に戻りますのっ。明日には帰ってきますわっ」

人に跨がったまま高圧的な態度で起こしてきたと思つたら、用事はそれだけだつたらしい。

彼女の実家は、世界有数の大企業であるYUMINOSAKIグループの社長宅である。ある理由と、彼女の家の掟で聡志の婚約者となつて、今は彼女専属のメイドと共にこのポロアパートの部屋に居るが、本来ならこんなところにはぜつたいに居ない人物だ。

「実家にね……、それじゃ元気で。俺は寝る」

「寝てどうするんですのっ!? このわたくしが少しの間とはいえ、この部屋から居なくなるんですのよっ!」

「少しつて、たったの一日だろうがっ、それで俺になにを言えつていうんだっ」

数分ほどキスを続け、やっと唇を離した聡志は、頬を染めながら見つめてくる彼女に尋ねた。

「だって聡志さま、先ほどから私の胸やお尻を見ていましたし……。今日は何度もここが元気に……」

大人びた美貌を染めながら話してきた言葉に、聡志はなんとも言えなくなってしまう。隠せていたと思っていた股間が、完全に彼女にバレていたのだ。

もう恥ずかしいやら情けないやらで、自分の存在をミクロン単位まで縮めたい、と思うほどである。

「我慢なさらなくても、私は……」

「か、香澄さんっ。いきなりなにを……っ!!」

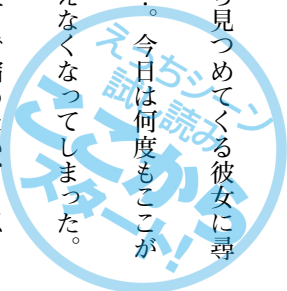
当然、彼女がメイド服の背中にあるファスナーを下げ、白いハーフカップのレースブラに包まれた峰乳を見せてきた。

今日一日の聡志の視線で彼女も興奮していたらしく、薄いレースの布地を押し上げている乳芽が、はつきりと透けて見えている。

ゴクッ……。

思わず生唾を飲み込んでしまった。

彼女は初体験の相手で、当然その胸やお尻。大事な部分までも見ている。だが、由美那



と許婚になってからは、こんな関係になるのは久々だ。

「前に、私は聡志さまのものだと言ったはずです。ですから、ください……聡志さまのを……ご主人さまのを私に……」

恥ずかしがりながらレースのブラをずり上げ、峰乳を見せながらベッドから彼の前にひざまずいてきたメイドの姿に、もう聡志は動けない。

目は大きな両胸を見せた彼女から離れなくなってしまう、ズボンからペニスを取り出されていく興奮に、肉幹が一段と硬くなってしまう。

「香澄さん……、俺もう興奮して……」

「わかっています。私にお任せ……きゃっ!」

彼女が聡志のズボンを下げ、トランクスをずらそうとした途端。跳ねるように飛び出してしまったペニスに、驚きの声をあげてきた。

「私の身体を見ただけで、こんなにしてくれていたなんて……うれしいです聡志さま。私のご奉仕で……その……気持ちよくなってください……はむっ……んっ……んっ……」

「うおおおっ!? いきなりそんなっ」

元氣すぎるペニスに魅惑的な笑みを零した彼女が、いきなり切っ先を形のいい唇に啜え、栗色の長髪を揺らしながら奉仕を開始してきた。

しかも大きな胸の谷間に肉幹を挟んで上下に動かす、胸淫まで加えての奉仕だ。

生暖かな口腔でザラザラと舌を亀頭に絡め、先割れに舌先を這わせるフェラと、フニフニと柔らかく、温かな体温と共に肉幹に絡みついてくるようなパイズリ奉仕に、聡志の股間にはまたたく間に甘ったるい痺れが広がってくる。

「うわ……気持ちいいよ香澄さん……うっ……すぐに落ちやいそうだ……」

「んふあっ……んっ……んっ……んあぁ……本当ですか？　なら、このご奉仕で、もっと気持ちよくさせちゃいますっ」

くちゅ……ちゅるるるるるるっ！

「くおっ!!　おとおおおおっ!」

聡志の言葉に喜んだメイドが、悪戯っ娘のような笑みを見せながら、もっと彼を気持ちよくさせようと奉仕の仕方を変えてきた。

生暖かな口腔に亀頭を含んだまま唇で優しくエラ裏を締めつけ、舌先を何度も先割れに往復させながら、頬をすぼめて吸引までしてきたのだ。

しかも、胸の奉仕はさらに激しくなり、柔らかな乳肌で優しく肉幹を擦りながら、温かな体温と心臓の鼓動まで伝えてくる。

「うあっ、うっ……ヤバイ……ほんとに出……」

口での奉仕、そして胸での奉仕もしてもらったことがあるが、その二つを同時に、しかも吸引まで加えられた奉仕は初めてだ。

ペニスには早くもムズくすぐったい痺れと、激しい濁液感が駆け登り。大きな胸の谷間に包まれている肉幹が、あまりの気持ちよさで溶かされていくように感じる。

「うおっ……香澄さんっ、もう……もうだめだっ！ 出る……でるっ！」

「んあっ……んっんっ……出しれふらさい……私の口にご主人ふあまのふお……聡志ふあまのをいつぶあい……んっ、んっ、んっ、んっ、んっ！」

チュパっ！ ちゆるっ！ チュパちゆるっ！

栗色の頭が何度も股間で前後に動き、肉幹が柔らかな乳肌で激しく擦られる。その刺激に、ペニスには尿意にも似た疼きと痺れが走り回り、股間に焦燥感ともいえる甘ったるさが広がり始めた。

龟头は限界まで膨れて鈴口を開き、塊と思えるような濁液が、脈動と共にペニスの内部を駆け登っていく。

「うわあああっ！ 出る香澄さん……香澄さんの口に……くううううううっ！」

どびゆるるっ！ びゅぷっ、びゆるるるるるるるっ！

「んふあ……んっ……んっ……んっんっ!? んんんんんんんんんん——っっ！」

濁液が鈴口から飛び出していく激しい痺れと共に、大人びたメイドの口腔に大量の精液が飛び散っていく。

股間からは甘ったるい痺れが全身に広がり、心地いい解放感と同時に、頭の中が真っ白

「ああ……」

ショーツを脱がし、彼女の大事な部分が空気に触れた瞬間。恥ずかしさに吐息をもらした香澄の声が聞こえてきた。

一瞬、その声に手がとまってしまったが、ここまできたらもう感情を抑えられない。聡志は素早く彼女の両脚からハイレグショーツを引き脱がし、なにも隠すものがない淫部を見つめてしまう。

「そんなに見られたら、は、恥ずかしいです……」  
ゴクツ。

メイドが大人びた美貌を真っ赤に染めながら、はにかんだ笑みを見せてくる。  
しかし、身体を隠そうとはしてこない。

まるで見せるように両手をベッドの上に広げ、少し両脚を開いて大事なところを見せてきた。

「か、香澄さんっ！」

呼吸にあわせて大きく揺れる胸。そして、愛液にまみれて淫唇を広げ、ヒクヒクとしている秘孔まで見せられた聡志は、もう我慢の限界だ。

感情のままメイドの上に乗る、ニーストッキングとガーターベルトに彩られた太腿を左右に広げさせながら、正常位の体勢で切っ先を秘孔に近づけていく。

「きて……きてくださいっ。久しぶりの聡志さまで、私のアソコを奥まで突き刺してくださいっ！」

久しぶりの結合に、香澄が歓喜の声をもらしながら大きなお尻を浮かし、挿入しやすいように秘孔の位置を上げてきた。

もう遠慮はいらない。

切っ先を愛液でヌルヌルとした秘孔に押しつけた彼は、そのままグイッと腰を前に動かして亀頭を押し込み、限界まで勃起したペニスをメイドの膣内に挿入していく。

ジュプ……ジュプジュプジュプ……ジュリュ……ジュプジュプジュプウウウッ！

「んああああッ！ 入ってきます……あふッ！ 聡志さまの熱いのが……私の中に……んうう……私のお腹の中にッ！」

亀頭が小さな膣口をくぐり、無数の膣壁が埋め尽くす膣内をズブズブと突き進んだ瞬間。香澄が大きな肉果実を押し潰すように聡志に抱きつき、肢体を震わせながら歓喜の声を部屋中に響かせてきた。

彼女の熱い胎内に入ったペニスには、無数の膣壁が優しく舐め溶かすように絡みつき、早く射精させようと蠢いてくる。

「うおおっ、すごいよ香澄さんっ！ 前の時よりも壁が絡みついて……くっ……すぐく気持ちよくなってるっ！」

「はあんんんッ！ 嬉しい……あふッ！ 嬉しいです聡志さま……もつと奥まで入れて……もつと私をメチャクチャにしてくださいいいいッ！」

ジュプ……ジュプジュプジュプジュプウウウウウウウウウウッ！

「きやううううううううううううううううッ！」

彼女の求めに答えるように腰を前へと動かし、一気にペニスの全てをメイドの膣内に挿入した途端。

彼女が甲高い声をあげながら、大量の愛液を肉幹と秘孔の隙間から吹き出してきた。

膣内に全て入ったペニスには無数の襞が絡みついて奥へとうねり、今にも亀頭が子宮口に触れようとしている。

「動くよっ。思いっきり突いて、香澄さんの中にいっぱい出しちゃうからねっ！」

「はッ、はい……抱いてください……んッ……私のエッチな身体をメチャクチャに突いて、お腹の中がいっぱいになるまで聡志さまを……、ご主人さまを注いでくださ……はうッ、あッ、んッ、ンあああッ！」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！

舐め溶かすようにペニスに絡みついてくる無数の膣襞に我慢ができず、彼女の言葉が終わる前に、聡志は腰を動かし始めてしまった。

肉幹を啜える秘孔は、ペニスがピストンする度に歪みながら吸いつき、淫らな挿入音を



部屋に響かせていく。

「はふうううッ！ あうッ、んあッ……すごいです……はふッ！ お腹の中が熱いのでいっぱいになって……はあはあ……私をご奉仕しなければいけないのに……なにも考えられなく……ああッ！」

香澄が艶めかしい声をあげながら肢体をくねらせ、ペニスのピストンに合わせてお尻を動かしてきた。

大きく揺れる峰乳や艶めかしい喘ぎ声。そして肉幹に絡みつきなながら彼女の胎内で捲れ返る膣壁の感触に、ペニスには早くもムズムズとした痺れが走っていく。

「すごいっ、すごい香澄さんっ！ 最高だよっ！」

「ひゃふッ！ うれしいです聡志さま……ンああッ！ もっと気持ちよくなってください……はあはあ……私の奥まで……奥まで突き刺して気持ちよくなってくださいッ！」

ジュプッ！ ジュプッ！ ジュプジュプッ！

全体を蠕動させてペニスを刺激してきた膣内に、もう腰を動かすこと以外考えられなくなってきた。

熱い胎内で無数の膣壁を掻き捲り、大量の愛液でヌメるメイドの身体を突き上げる度にペニスが痺れ、我慢しようとしても肉幹が太くなっていく。

大きく揺れていた峰乳に自然と両手を乗せて指を喰い込ませ、荒々しく揉みながら左右

の乳首を吸いまくってしまおう。

「んあッ、はあううううッ！ いいです……おっぱいもアソコも痺れて……私もうイッチやいそうですううううううッ！」

潤んだヒスイ色の瞳から歡喜の涙を零しながら、香澄が全身を痺れさせ始めた。

肢体はブリッジでもするように腰を持ち上げ、膣内が異常なほど震えて肉幹に襷を絡ませてくる。

龟头には、彼女の胎内を下りてきた子宮がとうとうぶつかり、早く精液を放出させようと、ゴム輪のような子宮口を切っ先に被せてきた。

「くうおおおっ！ 俺ももうダメだっ。出すからね香澄さんっ、香澄さんのお腹の中に……オマ○コにいっぱい出して、子宮に注ぎ込むからねっ！」

「はっ、はいッ……んひゃふううううッ！ 出してください……私の中に……オマ○コにいっぱい出して、子宮の中にいっぱい注ぎ込んでえええッ！」

ジュプッ！ ジュリュッ！ ジュプッ！ ジュリュジュプッ！

全身に広がってきた快樂と痺れに、もう二人ともなにも考えられなくなってきた。

聡志はメイドの峰乳をメチャクチャに揉みながら、秘孔を突くことしか考えられず。香澄は全身を痺れさせながら嬌声をあげ、いつもの言葉づかいさえ忘れて彼を受け入れている。

アパートの狭い部屋には、秘孔にペニスを出し入れさせる淫水音と、メイドの喘ぎ声が響きまくり、今にも絶頂しそうな二人をさらに興奮させていく。

「ください……ください聡志さまッ！ 熱いのをお腹の中に……私……私もうッ！」  
全身の肌を震わせながら求めてきた彼女の言葉に、もう聡志は答えられなくなっていた。限界なのは彼も同じだ。

少しでも気を抜いたら、肉幹だけじゃなく、エラ裏にまで絡みついてくる膣壁の刺激で射精しそうになってしまう。

ペニスはもう彼女の膣内で何度も脈動を繰り返し、どんなに射精をこらえようとしても、肉幹の内部に塊のような濁液が駆け登っていく。

「くっ、くおおおっ！ もう限界だ……香澄さんっ！ 香澄っ！」

「早く……早く来てくださいッ！ んあッ、あッあッあッ……ひやふうううッ!」

ドビュルルッ！ ドプッ……ビュルビュルビュルルルルルルルルルッッ！

「ンあああああああッ！ 出てます……聡志さまの熱いのが……ご主人さまの熱いのがいっぱい……イッパイいいいいいいいい——ッッッ！」

ペニス全体に走った強烈な痺れに我慢できず、根元まで思いつき秘孔に突き刺して、切っ先を子宮口にはめ込んだ瞬間。

我慢しきれなくなった精液が一気に尿道を駆け登り、弾けるようにメイドの膣内に飛び

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**